

橋梁ファブの高田機工（本社・大阪市浪速区）は、5月に長期ビジョン「VISION2035」を策定した。国内の新設鋼橋需要が減少する厳しい市場環境の中、同社は生産体制の転換に向けた社内改革を進めている。中村達郎社長に同社の現状と未来への展望を聞いた。（斎藤 雄輝）

——はじめに前期（2026年3月期）を振り返ると。

「売上高143億600万円（前期比22・5%減）、経常赤字3億100万円（前期3億6千万円の経常黒字）、最終赤字5億3500万円（同3億4300万円の最終黒字）」という厳しい結果になった。原因は需要環境の悪化にある。国内の道路橋発注量は24年度の約13万トから25年度は10万トを割り込むまで落ち込んだ。原材料やエネルギー

高田機工の現状と展望

中村 達郎社長に聞く



新設橋梁減少に事業改革で対応

長期的視点共有へ「VISION2035」策定

応策は。「個社としての事業改革を進める一方で、業界としても国土交通省や国会議員への働き掛けを続けていく。公共工事予算拡大への理解は少しずつ広がっており、すぐに数字には表れないが、業界全体の追い風になっていくと信じている」

「橋梁・鉄骨という創業以来の事業を礎としながら、そこにとどまらず進化していき、会社でありたいという思いを込めた。今後は意思決定の迅速化や組織間の連携、ジョブローテーションを含め、成長への基盤整備

コストの高騰も重なり赤字転落となった。ただ、この

苦しい状況をどう乗り越えるかを社内で徹底的に議論できたことは、大きな意味があったと考えている」

——今期は黒字転換を目指すしている。

「売上高145億円、経常利益3億2千万円、純利

——新設橋梁減少への対

——今年5月に長期ビジョン「VISION2035」を策定した。その

「社員に会社の10年後の業利益25億円、ROE8%を目標とする。現在の売上高と比べて、3力年の中期経営計画だけでは、どうしても倍以上の規模を描いていく目の前の数字を追うことになる。決して容易な数字ではないが、既設橋梁の点検・

10年後売上高350億円目指す

保全事業や独自技術の『生研トラス』など成長領域への経営資源の投入、和歌山工場の競争力強化、多能工化、DXによる生産性改革などを一つずつ積み上げていけば、十分に到達可能な目標であると考えている」

「生研トラス事業や保全事業といった新たな柱の成長で、事業ポートフォリオの転換を目指す。」

「『生研トラス』は体育館やアリーナ、格納庫、駅の屋根など大空間建築に使われる技術で、鋼材使用量の抑制や降雪への耐荷性などが特徴だ。今後は防衛関連施設の需要増にも期待している。また、橋梁保全事業の営業を強化しており、1件の採用が決まれば、数十億円規模になる可能性が

——工場設備や人的資本への投資だけでなく、M&Aも選択肢に。

「既存事業とのシナジーだけでなく、事業の幅を広げるための協業など、新たな事業領域への進出も含め、成長につながる投資を検討していく」

——10年後に向けた若手社員への思いは。

「今年度は9人の新卒社員が入社してくれた。彼らの未来をしっかりと作ってあげたいという気持ちがある。当社には100年以上の歴史があるが、これまでの教育制度が十分整っていない。今年度から階層別研修を本格化させ、次の世代に安心して力を発揮してもらう。変化を恐れず、社員とともに一つずつ課題を乗り越える。新しい技術や発想を取り入れることで、次世代が誇りを持って働ける会社にしていきたい」